

在籍校名
職・氏名

福岡県立川崎特別支援学校
教諭 肱岡 文

研修報告書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

1 研修種別

D 福岡県教育センター研修員

2 主題研修について

研究主題 知的障がいをもつ生徒Aが、場面に応じた対応力を身に付ける姿を目指した自立活動の指導－思考の可視化と実践する場の設定を通して－

(1) 研究のねらい

ア 課題の背景

(7) 対象生徒の実態から

本研究の対象生徒は、特別支援学校の中学部〇学年に在籍する知的障がいをもつ生徒Aである。生徒Aは、司会や他の教室への入退室時の言葉のように言うべき言葉が分かっている場合は、スムーズに話すことができる。一方、言うべき言葉が明確になっていない場面でのコミュニケーションで、会話が想定した流れと異なる流れになった場合に、場にそぐわない想定したせりふをそのまま言ったり、黙ったりすることがあった。これは、経験の少なさや聞かれたことを忘れてしまうことから、問題の解決に固定化された方法で対処してしまうためであると考えられる。このことから、生徒Aは場面に応じた対応をすることが難しいという課題が明らかになった。

WISC-Ⅲ検査では、知覚統合が強く、注意記憶や処理速度が弱い結果であった(表1)。検査では、教師が読む問題文を生徒Aが復唱する際に、数字が置き換わる姿が見られた。このことから聴覚的な情報処理に苦手さがあることが分かる。そして、処理速度の弱さから、抽象的な視覚的情報を記憶することに困難さがあることも分かる。一方、具体的で有意義の視覚的情報において、物と物の関係を捉えたり、結び付けたりする力が強いことから、具体的な絵や図を使って思考を整理することが有効であると考えられる。

以上を踏まえ、生徒Aの実態を整理、分析し、課題関連図を作成した。その結果「目に見えない言葉を聞いて理解したり、考えたりすることが苦手である」ことが生徒Aの中心課題だと見いだした(図1)。したがって、場面に応じた対応力を身に付けるための手立てとして、経験したことや思考を可視化し、明確にすることで考えやすくすることや、会話場面を仕組み、考えたことを実践したり、経験からより良い行動の仕方を考えたりすることが必要だと考えた。

表1 WISC-Ⅲ検査結果(〇年〇月実施)

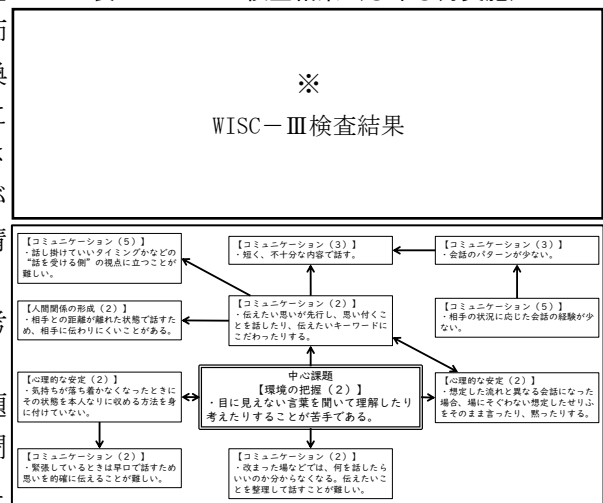
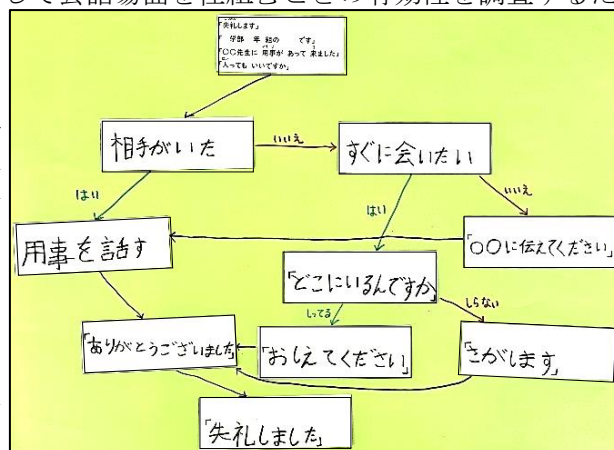


図1 生徒Aの課題関連図

(イ) 試行授業から（自立活動「手掛かりを集めて、持ち主を見付けよう」全4時間）

生徒Aの思考を可視化することや、実践する場として会話場面を仕組むことの有効性を調査するため、試行授業を行った。

思考を可視化するため、場面に応じた対応について考えたことを付箋に書き、フローチャートで整理することができるようにしたところ（資料1）、生徒Aは過去の経験を想起し、同じ状況になった場合の答え方を事前に想定する姿が見られた。このことから、生徒Aが場面に応じた対応力を身に付けるために、思考を可視化することは有効だと考える。さらに高めたい点は指導内容と般化である。前者は、生徒Aができる行動や難しい行動を明らかにし、指導内容を焦点化することである。相手の状況に応じた行動をした経験が少ないことから、その状況に応じた行動を考えることが難しいため、内容を焦点化する必要がある。後者は、可視化した思考を生活につなげることである。考えたことを実践する場を設定することが必要だと考える。



資料1 生徒Aが作成したフローチャート

実際の会話場面においては、事前に想定していた状況について、フローチャートを基に落ち着いてやり取りをする姿が見られた。このことから、実際の会話場面を仕組むことは、生徒Aが場面に応じた対応力を身に付けるために有効だと考える。さらに高めたい点は相手の状況に応じた行動である。相手が今、話せる状況か確認しないまま話す姿が見られた。これを高めるために、思考を可視化し、自身が行った場面に応じた行動や、より良い行動について考えることが必要だと考える。

イ 研究の目的

自立活動の指導において、知的障がいをもつ生徒Aが、場面に応じた対応力を身に付ける姿を目指し、思考を可視化し、実践する場を設定した指導の在り方を究明していく。

(2) 研究の構想

ア 主題の説明

(7) 主題について

場面に応じるとは、場や状況を的確に把握することである。対応力とは、相手とやり取りをする活動の中で、事前に想定した適切な言葉や行動を判断し、実行することである。つまり、場面に応じた対応力とは、想定した場や状況において経験や新たな行動様式から適切な行動を認知し、その中から場や状況に応じて適切な言葉や行動を選択する<組み合わせる力>、想定した場や状況に応じて適切な行動を選択して行動し、適切な行動などができたことを実感することができる<行動する力>の二つの力である。

(イ) 副題について

思考の可視化とは、相手の状況やそれに対応する行動を、操作しやすい付箋に書きため、それらを並べ替えたり、組み合わせたりして整理することである。この思考の可視化を通して、<組み合わせる力>を高める。具体的には、自身の経験を振り返ったり、教師に聞いたりして適切な行動に気付くことができるようにする。それを文字で書き表して明確にすることで、適切な行動への意識を高めることができるようにする。そして、経験や新たな行動様式を書いた付箋を組み合わせることでフローチャートを作成することで、その場における一連の行動の流れを明確にする。実践する場の設定とは<行動する力>を高めるためにロールプレイや実際の会話場面を仕組み、適切な行動ができたことについて振り返る活動を、フローチャートの作成後に仕組むことである。具体的には、ロールプレイや実際の場でのやり取りを通して、フローチャートの作成で考えた様々な状況における一連の行動を実際に行う。そして、目的が達成できたかという視点でやり取りを振り返り、適切な行動ができたことを実感することを通して、適切な行動を強化し、般化することができるようにする。

イ 研究の内容

本研究で目指す生徒Aの姿を以下に示す。また、研究構想図を図2に示す。

- 必要な情報や物を入手する場において、経験や新たな行動様式から適切な行動を認知し、相手の状況に応じて適切な行動を選択することができる。 <組み合わせる力>
- 必要な情報や物を入手する場において、相手の状況に応じて適切な行動を選択して行動し、適切な行動ができたことを実感することができる。 <行動する力>

【作る】段階では、想定した状況における適切な行動を明確にし、一連の行動の流れとして整理することを目指し、思考の可視化を行う。そのために、生徒Aが適切な行動を付箋に書くことを通してその行動を認知することができるようにする。そして、その付箋の中からその場における行動を選択して、模造紙上で組み合わせせてフローチャートを作成し、想定した一連の行動を明確にする。また、思考を促す支援として、自身の経験を振り返ることができるよう、場面に応じた行動がかかれた絵カードを提示する。付箋を組み合わせることが難しい場合は、コミック会話を用いて状況を絵や文字で表現する。

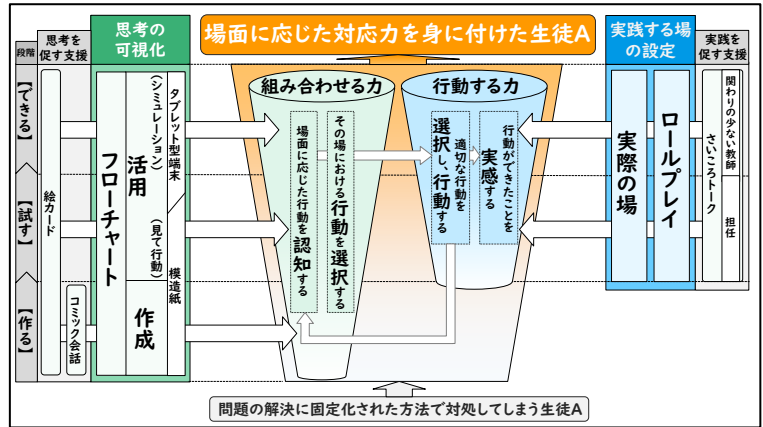


図2 研究構想図

【試す】段階では、フローチャートの一連の行動を実践したり、確認したりすることを目指し、実践する場の設定と思考の可視化を行う。そのために、フローチャートで場面に応じた行動を確認しながら一連のやり取りを行うことができるようにする。実践する場は、ロールプレイ、実際の場へと段階的に設定する。実際の場でのやり取りでは、フローチャートを撮影したタブレット型端末を携帯して適宜行動を確認できるようにする。そして、付箋や絵カードを使ってやり取りを振り返り、目的を達成したことから適切な行動ができたことを実感したり、課題からより良い行動を認知したりすることができるようにする。また、実践を促す支援として、さいころの目によって場や状況を決定するさいころトークを行い、やり取りをする相手は担任とする。

【できる】段階では、やり取りをする活動の中で、場面に応じた行動を強化したり、般化したりすることを目指し、思考の可視化と実践する場の設定を繰り返し行う。そのために、フローチャートを見ずに実践する場を設定することで、より実際に近い状況で生徒Aが場面に応じた行動を実践することができるようにする。また、やり取りをする相手を、生徒Aと関わりの少ない教師へ段階的に広げる。そして、場面に応じた行動ができたことを称賛することで適切な行動を強化するとともに、生徒Aがやり取りを振り返り、場面に応じた適切な行動ができたことを実感できるようにする。さらに、自身ができるより良い行動を再度考え、実践する場を設定することで般化につなげる。

(3) 研究の実際

ア 実証授業の単元指導計画

単元名		自立活動『○○だったらこうする』をたくさん見つけよう								
単元目標	組合せ	○ 必要な情報や物を入手する教師とのやり取りにおいて、経験や新たな行動様式から適切な行動を認知し、その中から相手が不在などの状況に応じた適切な行動を選択することができる。【心理的な安定(2)、人間関係の形成(2)、環境の把握(2)、コミュニケーション(3)(5)】								
	行動	○ 必要な情報や物を入手するために教師とやり取りをする際、相手の状況に応じた適切な行動を選択して行動し、適切な行動ができたことを実感することができる。【心理的な安定(2)、人間関係の形成(2)、コミュニケーション(3)(5)】								
段階配時		【作る】		【試す】		【できる】				
目標	組合せ	1	2	3	4	5	6	7	8	
	行動	○ 場面に応じた行動を認知する。		○ フローチャートを基に適切な行動を選択する。		○ やり取りのシミュレーションで適切な行動を選択する。		○ 状況に応じて適切な行動を選択する。		
	意欲	○ 条件に応じて適切な行動を選択する。		○ 課題からより良い行動を認知する。						
学習活動	付箋、フローチャートの作成(相手が不在の状況、忙しい状況)	○ 本単元の活動の目的を知り、見通しをもつ。		○ フローチャートを見て一連の行動を確認		○ フローチャートで事前に一連の行動を確認		○ 本単元を通してできるようになったことなどをワークシートに書く。		
	可視化	○ フローチャートの作成		○ フローチャートを見て一連の行動を確認		○ フローチャートで事前に一連の行動を確認		○ 状況に応じた適切な行動を発表		
手立て	実践	付箋、フローチャート		絵カード		ロールプレイ		さいころトーク		
	実践	絵カード、コミック会話		ロールプレイ		さいころトーク		実際の場		

イ 指導の実際と考察

(7) 【作る】段階（3時間）

【作る】段階では、本単元の活動の目的を知り、見通しをもつこと、及び、場面に応じた行動を認知し、状況などに応じて適切な行動を選択する〈組み合わせる力〉を付けることをねらいとした。

まず、活動の目的と活動内容を示したスライドを提示して、来年度の現場実習で様々な人と自信をもって話することができるようになるという活動の目的と、一連の行動の流れを表したフローチャートを作成し、教師とやり取りをするという本単元の見通しをもつことができるようにした。生徒Aは、スライドに注目して教師の話を受納げながら聞くことができた。

次に、必要な情報や物を入手するために、やり取りを行うことを確認した。その際、相手の状況によって異なる行動をする必要があることから、場面に応じた行動を考える場を設定した。具体的には、生徒Aの学校生活や職業生活を見通して、相手が不在の状況や忙しい状況を選定した。ここでは、場面に応じた行動を認知し、状況に応じて適切な行動を選択するため、付箋とフローチャートによる思考の可視化を行った（図3）。フローチャートは表2の流れで作成した。

相手が不在の状況、忙しい状況などの順に、場面に応じた行動を考えた。前者は試行授業で考えた内容だが、後者は経験が少ない状況である。相手が不在の状況の行動では「探す」と付箋に書くことができた。しかし、相手が忙しい状況の行動を考えることが難しい様子が見られたため、場面に応じた行動を表す絵カードを複数枚提示した。すると、「時間を聞く」という絵カードに着目し、話ができる時間を聞けば良いことに気付くことができた（図4）。

場面に応じた行動を書いた付箋を書きためた後、一連の行動をフローチャートで整理した。相手が他の人と話している状況で直接話さなくてもよいときに、適切だと思われる行動を組み合わせることが難しい様子が見られた。そこで、コミック会話を用いて状況を絵や文字で表現し、提示したところ、「伝言を頼む」という行動を選択することができた。このようにして一連の行動を表したフローチャートを完成させることができた（資料2）。

これらのことから、生徒Aの生活場面が想像できる状況を場面設定し、単元の流れやこれまでに作成したことのあるフローチャートを提示したことで、見通しをもつことができたと考える。また、フローチャートを使って思考を可視化することで、場面に応じた行動を知り、状況などに応じて適切と思われる行動を選択することができたと考える。

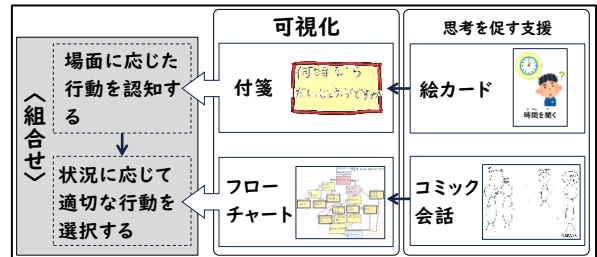


図3 【作る】段階のねらいと手立て

表2 フローチャート作成の手順

順序	内容	組み合わせる力
1	生徒Aの考える入室から退室までの行動の流れを付箋に書く。	—
2	「○○だったらどうするか」と、思考を促す発問をする。	認知
3	生徒Aが経験したことのない行動の場合、絵カードを提示し、教える。	
4	付箋を矢印でつなぐフローチャート作成を通して、一連の行動を整理する。	行動を選択
5	状況に応じた行動を選択することが難しい場合は、コミック会話を提示する。	

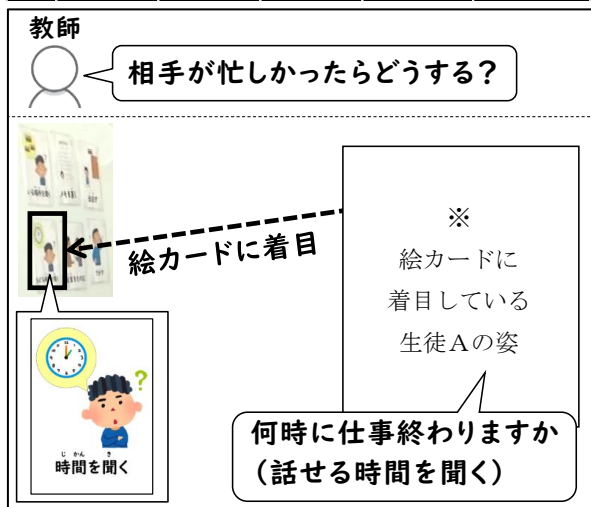
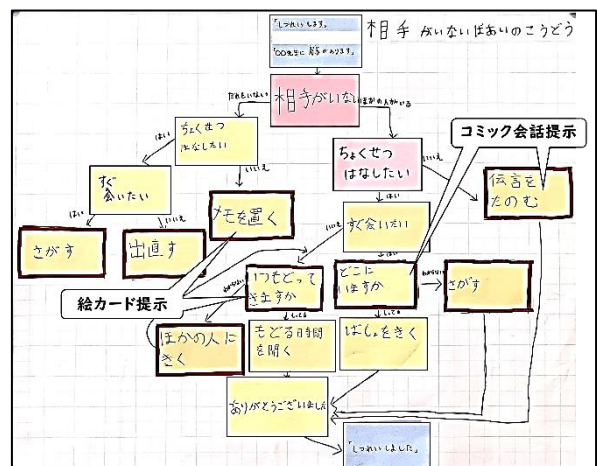


図4 場面に応じた行動を考える際の手立て



資料2 生徒Aが作成したフローチャート

(イ) 【試す】段階（2時間）

【試す】段階では、状況に応じたフローチャートを基に、適切な行動を選択してやり取りをし、適切な行動ができたことを実感する〈行動する力〉と、課題からより良い行動を認知する〈組み合わせる力〉を付けることをねらいとした。

そのために、相手が忙しい状況などについて、場面に応じた行動を実践する場の設定と思考の可視化を行った。ここでは、前段階で作成したフローチャートを基に、選択した行動をやり取りの中で実践したり、より良い行動を認知したりするため、さいころトークで場や状況を決定し、実際の場などによる実践する場の設定と、フローチャートによる思考の可視化を行った（図5）。

まず、作業場所や時間を尋ねる場における相手が忙しい状況での担任とのやり取りでは、「出直す」ことを選択し、行動することができた。実際の場などでのやり取りを繰り返し行ったことで徐々にフローチャートを見る回数が減り、適切だと思われる行動を、自分で判断し行動することができるようになった。

次に、やり取りについて振り返った。ここでは、適切な行動ができたことを実感したり、課題からより良い行動に気付いたりするため、フローチャートによる思考の可視化を行った。やり取りで「出直す」という行動を選択した後、いつ戻ったらよいか困ったことを振り返った。その際、より良い行動を考えることが難しい様子が見られたため、フローチャートで確認すると、「話せる時間を聞く」という方法があると気付くことができた。

これらのことから、実際の場などで実践して振り返りを行う実践する場を設定し、フローチャートで思考を可視化することで、生徒Aはやり取りの中で適切な行動を選択して行動し、自身の行動を振り返って適切な行動ができたことや、より良い行動に気付くことができたと考える。

(ウ) 【できる】段階（3時間）

【できる】段階では、やり取りのシミュレーションで適切な行動を選択する〈組み合わせる力〉と、実際のやり取りの中で選択した行動をし、適切な行動を実感する〈行動する力〉を付けること、さらに、自身がよりやりやすい方法を考えることを通して、より良い行動を認知し、再度実践することで場面に応じた行動を般化につなげることをねらいとした。

そのために、相手が不在の状況などについて、一連の行動を想定する思考の可視化と、場面に応じた行動を実践する場を設定した。ここでは、事前にシミュレーションをし、適切な行動を自分で判断して行動するため、フローチャートによる思考の可視化と実際の場などによる実践する場の設定を行った（図6）。

まず、必要な物を取りに行くという場の設定で、相手が不在の状況でのやり取りについて、フローチャートを撮影したタブレット型端末を操作しながら行動の練習をする姿が見られた。また、実際のやり取りでは、不在の相手がいると思われる場所へ探しに行く決めて行動することができた。

次に、やり取りを振り返り、自分にとってよりやりやすい方法はないかという視点でより良い行動を考え、再度実践する場を設定した。生徒Aは、相手が不在の状況においては、その場にいる人に相手がいる場所を尋ねた方が良く自身の考えを教師に伝え、実際に職員室にいる教師に「B先生はどこにいますか」と尋ねることができた。

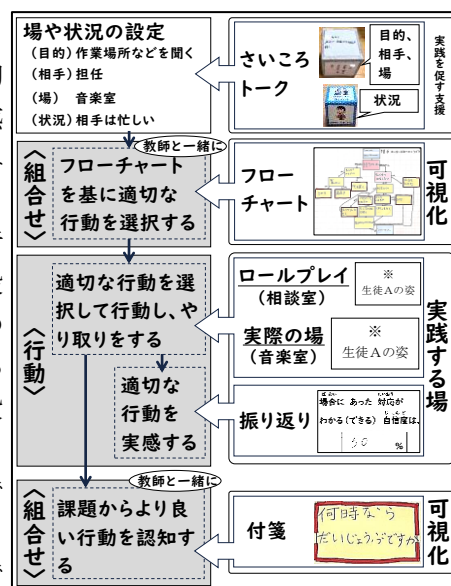


図5 【試す】段階のねらいと手立て

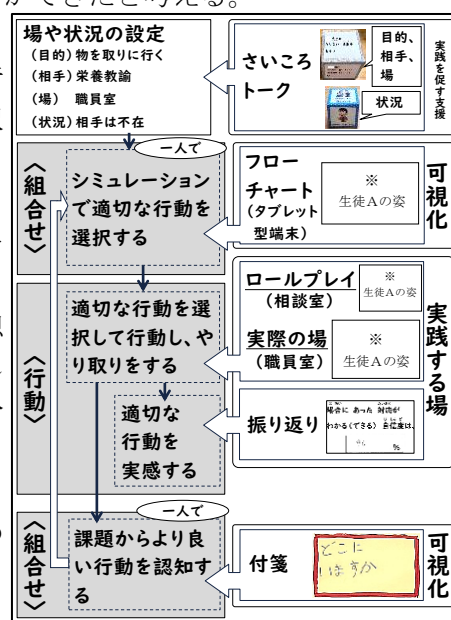


図6 【できる】段階のねらいと手立て

これらのことから、フローチャートで一連の行動をシミュレーションする思考の可視化と、ロールプレイなどで実践して振り返りを行う実践する場を設定することで、事前に一連の行動を想定して、実際のやり取りの中で適切な行動を自身で判断し、行動することができたと考える。また、自身がやりやすい方法を考え、行動することを通して、場面に応じた行動を生活場面においても無理なくできるよう般化につなげることができたと考える。

(4) 全体考察

生徒Aが場面に応じた行動を自分で考え、発表した割合の推移を示す(図7)。相手が不在の状況などに応じた行動を答える際、分からないと発言することが多かった生徒Aが、適切な行動を選択することができるようになった。これは、付箋やフローチャートを使って、適切な行動や一連の行動を可視化したことで、一連の行動に見通しをもち、場面に応じた行動を認知し、選択することができたためと考えられる。

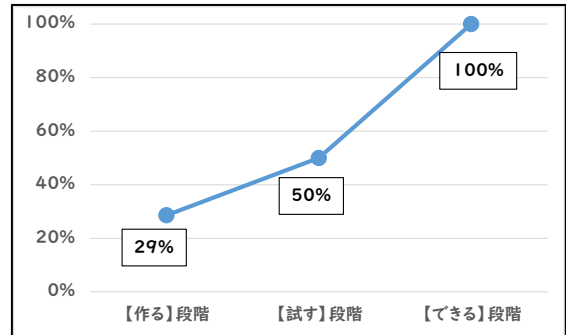


図7 場面に応じた行動を自分で考えた割合の推移

また、試行授業④と実証授業⑦での相手が不在の状況における生徒Aと教師のやり取りから、生徒Aの変容を示す(図8)。固定化された言葉を言っていた生徒Aが状況を見て、相手の居場所を尋ねることを選択し、行動できるようになった。これは、付箋やフローチャートによる思考の可視化を徐々に減らしながら、実践する場を設定したことで、場面に応じた行動の中から、適切な行動を選択して行動することができるようになったためと考えられる。加えて、単元終末で、ワークシートに「場面に応じた行動が分かる(できる)自信度は100%」と書いたり、「(本単元の学習は)働くときに役立つ」と発言したりしたことから、生徒Aが場面に応じた行動ができたことを実感していることも分かる。

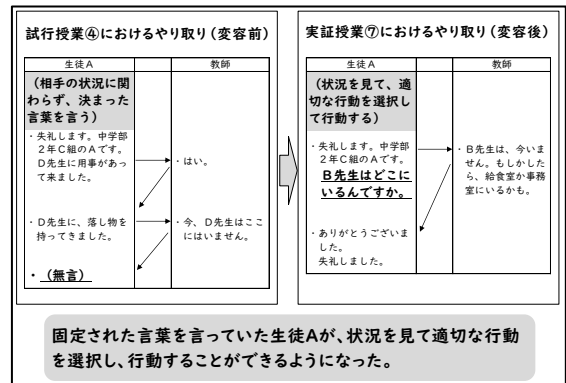


図8 相手が不在の状況での生徒Aの対応の変容

以上のことから、生徒Aが場面に応じた対応力を身に付けるために、思考の可視化と実践する場の設定を行うことが有効であったことが分かった。

さらに、日常生活では、関わりの少ない相手に尋ねたいことがあるとき、これまでほどのように尋ねればよいか分からないと言い、やり取りを避けようとするものがあつたが、学習後は進んでやり取りをし、尋ねようとする姿が見られるようになってきた。

(5) 研究の成果と今後の課題

ア 研究の成果

- 付箋やフローチャートを使って場面に応じた行動や一連の行動を明確にする思考の可視化は、相手とのやり取りにおいて生徒Aが状況を的確に捉え、場面に応じた適切な行動を選択する上で有効であった。
- ロールプレイや実際場で実践して振り返りを行う実践する場を設定したことは、生徒Aが思考の可視化で明確にした場面に応じた行動や一連の行動を実際の行動に結び付け、行動ができたことを実感できるようにする上で有効であった。

イ 今後の課題

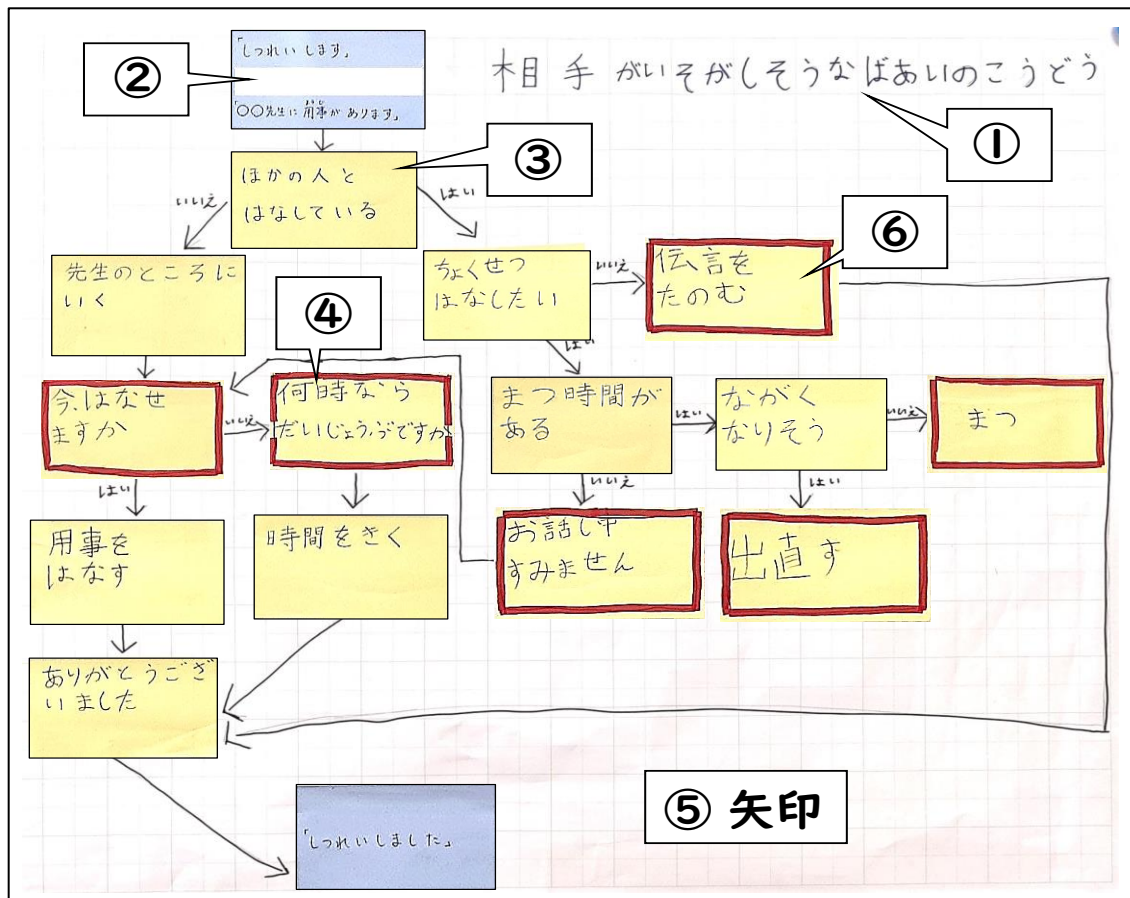
- 他の学校生活場面においても場面に応じた行動を実践し、般化につなげる必要がある。

<参考文献>

- ・ 日本教育工学協会HP 2018年度研究発表論文より 川崎市立富士見台小学校 細川 直弥他
「コミュニケーションと相手の気持ちの理解が苦手な児童への支援—通級による指導におけるICT活用と論理的思考の育成を通して—」 <https://jaet.jp/> 2022. 7. 14


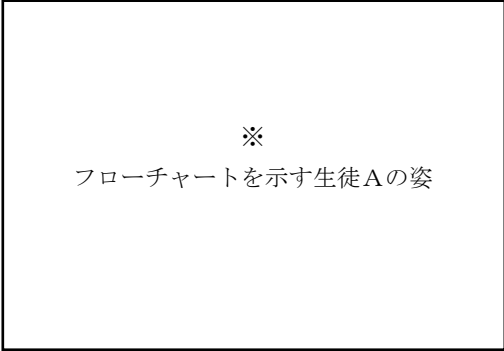
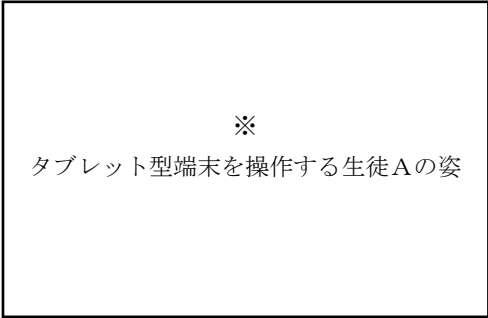
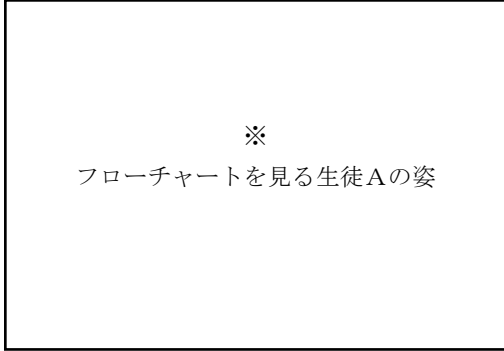
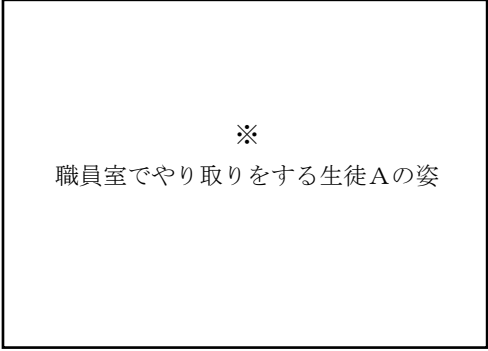
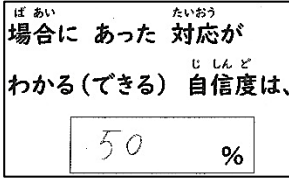
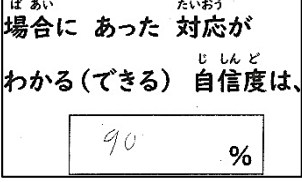
【添付資料】

○ 思考を可視化するフローチャート作成の流れ（【作る】段階）



順序	内容（教師の支援と生徒の発言など）	<組合せ>
①	過去の経験を想起できるスライドを提示し、状況を設定する。 教師「話し掛けようと思ったら、相手が忙しそうだったことはありますか。」	—
②	生徒Aの考える入室から退室までの行動の流れを付箋に書くよう促す。 「うれしいです。」 「〇〇先生に用事があります。」 先生のところにいく 用事をはなす ありがとうございました 「うれしかったです。」	—
③	思考を促す発問をする。 教師 「相手が他の人と話していたらどうしますか。」 生徒A 「待つ。」	認知
④	絵カードを提示する。 教師 「相手が、今すぐは話せないと言ったらどうしますか。」 生徒A 「分かん。」 教師 「（絵カードを複数枚提示して）この中に使えるような行動はありますか。」 生徒A 「（「時間を聞く」絵カードに着目して）何時に仕事終わりますか。」	
⑤	付箋を矢印でつなぐよう促し、一連の行動を整理できるようにする。	選択
⑥	コミック会話を提示する。 教師 「自分が直接言わなくてもいいときは、どの行動をしますか。」 生徒A 「分かん。」 教師 （コミック会話を提示して、状況などを説明する。） 生徒A 「誰かの先生に言う。」	

○ 実践する場におけるさいころトークを使ったやり取りの流れ

順序	【試す】段階	【できる】段階	<組合せ>
	ロールプレイ (相談室)	実際の場合 (職員室)	<行動>
①	さいころAで場の設定をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・担任にプリントをもらう。 ・担任に美術で準備する物を聞く。 ・担任に美術の場所が変わったことを伝える。 ※向かい合う面は同じ内容	さいころAで場の設定をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・B先生 (栄養教諭) に足りない食器をもらう。 ・E先生 (学部主事) に全校集会の司会の原稿をもらって全校集会がある日にちを聞く。 ※三つの面は同じ内容	—
	さいころBで状況の設定をする。 ①誰もいない ②他の人がいる ③仕事中 (二面) ④他の人と話している (二面)  さいころB		
②	状況に応じたフローチャートを選択する。  ※ フローチャートを示す生徒Aの姿	フローチャート (タブレット型端末) を使ってシミュレーションをする。  ※ タブレット型端末を操作する生徒Aの姿	<組合せ> 選択
③	フローチャートで確認をしながら、適切な行動を選択して行動し、やり取りをする。  ※ フローチャートを見る生徒Aの姿	状況に応じて、適切な行動を選択して行動し、やり取りをする。  ※ 職員室でやり取りをする生徒Aの姿	<行動> 行動
④	やり取りを振り返り、適切な行動ができたことを実感する。  ※ 50 %	やり取りを振り返り、適切な行動ができたことを実感する。  ※ 90 %	<行動> 実感
⑤	課題からより良い行動を認知する。	課題からより良い行動を認知する。	<組合せ> 認知
⑥	さいころA、Bを用いて、異なる場や状況を設定し、やり取りをする。	より良い行動を再度実践する。	行動 など